

脳波検査実施困難児に対する覚醒・睡眠脳波記録のための本院での取り組みの一例

◎河合 駿¹⁾、前田 圭介²⁾、細田 奈未¹⁾、福本 純一¹⁾、藤田 志保¹⁾、高須賀 広久¹⁾、藤田 孝¹⁾
藤田医科大学病院¹⁾、藤田医科大学²⁾

【背景】覚醒時脳波は、覚醒時脳波異常の検出や各年齢に応じた脳波所見を判断するために必須である。また睡眠時の脳波記録はてんかん性突発波の検出に特に有用である。しかし小児の場合、体動や啼泣により電極の装着や固定が困難となり覚醒時の脳波記録が得られないことがある。また入眠が困難な症例も多い。今回我々は、脳波検査の実施に苦慮していた小児例に対して、検査情報システムの活用と定期的なカンファレンスの実施により、覚醒時及び睡眠時の両脳波記録を継続して得ることができた一例を報告する。

【症例】10歳、男性、症候性てんかんにて当院通院中。重度知的障害のため脳波電極装着困難あり。トリクロリールが効かず夜間含め入眠困難あり。発作は月単位で発生。発作増減に対する投薬評価のため定期的な脳波検査を施行し、覚醒時及び睡眠時の両脳波記録を評価している。

【取り組み】検査情報システムを用いて、患者の脳波検査時の状況などの情報集約および脳波技師間での共有を行った。さらにてんかん専門医を交えたカンファレンスを定期

的に開催し、医師間との事例の共有及び脳波検査時の対応策について検討を行った。その結果、検査時間枠の変更、脳波電極装着時におけるネットや弾性包帯等による電極固定の実施、また医師からの睡眠導入剤の変更指示などの取り組みにより、全ての脳波記録で覚醒時が得られ、またほとんどの記録で睡眠時が得られた。

【考察】本症例は検査情報システムの活用やカンファレンスの実施により効果的な情報共有及び対応策の検討を行うことが出来た。その結果、患者に最適な電極装着方法や睡眠導入剤の選択がなされ、覚醒時及び睡眠時の両脳波記録を継続して得ることが出来たと考える。

【結語】当院における検査情報システムの活用と医師との定期的なカンファレンスの実施は覚醒時及び睡眠時の両脳波記録を得るのに有用であることが示唆された。今後も継続することでてんかん診療に有用な脳波記録の提供に努めていきたい。

連絡先：藤田医科大学病院 臨床検査部

TEL 0562-93-2296